

編集デスク <29>

惜櫟荘(せきれきそう)はすなわち熱海に建てられた岩波茂雄の別荘である。ここは客ずきであった岩波茂雄が、物資の乏しいなかでも好んで客をしたところであり、最後の息を引きとったところでもある。この別荘の庭には櫟(くぬぎ)の大木がわだかまっていた。別荘を建てるのに、これを邪魔として切ろうという大工に、岩波は「この木を切るなら、その前におれの腕を切れ」と言ったのである。くぬぎはやくぎな木だ。おぬみたいたと云った。別荘の名のあるゆえんである。

小林勇著「惜櫟荘主人」は「一つの岩波茂雄伝」と副題されているように、岩波茂雄の生涯を浮き彫りしたものである。著者は 18 才の時岩波書店に入った。そして現在は岩波書店の会長であるが、その間に図書配達の荷車ひきから編集の苦労をつぶさに、岩波書店主の娘と結婚しているから、書店主との関係は店

のだんな(岩波書店では「先生」と呼んだ)から父に変わっている。そのような関係が、日本の出版界にアカデミズムの基礎を築いた文化人岩波茂雄の赤裸々な人間性を洗い出すことにもなったのである。著者の著述家としての力量はすでに幸田露伴や寺田寅彦などについて記した回想記によって十分に評価されている。エッセイストクラブ賞も受賞してい

惜櫟荘主人

——長谷川 泉——

る。「惜櫟荘主人」は、半生を共にし苦楽を分かったひとりの偉大な人間の、今まであらわにされなかった側面をあかすみに出した。友人安倍能成の書いた岩波茂雄伝とは異なったアングルがそこにある。

といって、本書は決して身近にあった者の露悪趣味に堕してはいない。むしろ岩波書店が高くかかげ、岩波茂雄が標榜した出版文化の息吹きが、全巻に溢れて本書の価値を高

からしめている。岩波茂雄の文章がふんだんに引用され、資料が適宜に盛り込まれ、それを埋めるものは、今まで公にされなかった岩波茂雄の言動であり、著者自身のものの考え方でもある。著者自身もまた個性の強い人がらである。

「低く暮し高く想ふ」——とは、岩波茂雄の信条であった。また戦争中の右翼の狂信的巨魁蓑田胸喜にあてた手紙の中の一節「小生は一冊の雑誌一冊の図書を出版するにも未だ曾て学術の爲め、社会の爲めを思はざる事なく」といったようなバックボーンは全篇を貫いて清風を送る。そのようなことだけが干からびた理論として展開される場合には、伝記は死んだであろうが、武骨な人間性をまきちらす岩波茂雄の人間性と密着して描写される時にさわやかな清風をもたらしたのである。岩波書店は、岩波茂雄の亡きあとも、その出版物によって広く読者を獲得している。だが、本書は、岩波書店びいきの読者をさらに拡大するであろう。

あとがき

▶ひと月早く雨が降り続いたので今年は空梅雨かなどとさきやかれています。空梅雨も困るが、さりとてじとじとした天気も困るというのが一般の人びとの心だろうと思います。2, 3 年前から不快指数ということばがジャーナリズムでもてはやされ何かというと不快指数が使われましたが、たしかに湿度が多くなると何となく気分が悪くなってきます。カラッと晴れた天気で、カラッとした気持ちで私たちも毎日を暮したいと思います。

▶先月号の次号予告で、今号では「予科期の実習」の特集をすることにしてありましたが、一部の執筆者のご都合がどうにもつかず、特集は中止になりましたが、佐野、海川両先生

の寄稿を得ました。その代り東大衛君の浅田先生のすばらしい原稿が入手できましたのでトップを飾ることにいたしました。

▶本年度看護協会総会では、社会に対する広報活動を強化することが決定されましたが、社会の人びとの看護界に対する認識は驚くほど低いのが実状のようです。看護教育界も教育の一分野として、私たちが考えればひじょうに重要な位置をしめているのにもかかわらず、社会的な認識や評価はなお片隅のものとして置き忘れられている面が多いように思われます。そこで本誌では、従前から一般教育界との交流をねらって各大学の先生方や教育界の方々に本誌に登場をお願いしてききましたが、今後さらにこの交流を強めてゆきたいと考えております。今月から「巻頭言」の欄を設けましたのもそのねらいの

一つであります。

▶来月号は、今、看護界で大きな問題になっております「看護婦の指導性」の問題を、教育的見地からとりあげてみました。ナースが指導性を持たなければならないことは、すでに広く云われているところですが、では指導性のあるナースを育てるにはどうしたらよいかということが、ひじょうに大きな問題となってくると思います。

▶2 年間、この「看護教育」を担当して、多くの先生方や看護婦さん、学生たちと接することができ、私個人としても人間的に大きく飛躍することができました。このたび担当を代ることになりましたが、同じ看護デスクにおりますので、今後ともご指導下さいますようお願いいたします。(西村恭彦)